
僕のファンタジー

ザックバラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕的ファンタジー

【Nコード】

N1186G

【作者名】

ザックバラン

【あらすじ】

技術が進んだ毎日同じ事の繰り返し日々。そんな毎日に刺激が欲しかった僕は危険な下層にピクニック気分で忍び込んだんだ。それがこんな事になるなんて…

プロローグ…彼との出会い

ああ…死ぬのか…つまらない人生だったな…
そんなことを考えながら…

意識を失った。

眩しい…

鳥の鳴き声…

朝？

いや…死んだはず…

天国？

いやそんな非科学的な…

そんな疑問と共に僕は起き上がった。

「あれ？」

（ここは…どこ？）

なんか大変な事になってるかもしれない…どうやら森の中みたいだった。

そこに僕は木の幹に誰かに寝かせられたみたいに寄り掛かっていたようだ。

「ん…」

軽く伸びをする。体調はすこぶる良好。

「はっ！！」

というか今ごろ気付いた。

（そういえば死んだんだった…）

下を見るが足は付いているようだ。

（あれは…夢？それとも…これが…夢？）

少々頭が現在の状況についていけない。…が

「うん とりあえずお腹空いた」

体は正直だ。森を歩く。

森は今は良い季節なのか豊富な果実や山菜などが生えていて空いた

お腹には助かった。

しかし…

（人の気配がしないね…）

どうやらだいたい歩いてみたがこの近くには人の住むような場所はないみたいだ。

（困ったな…）

まだ日は高いが今の時期は景色からして秋早めに床を探さないとすぐに日が暮れてしまう。

困った困ったと探していると洋館らしきものが見えきた。しかし…

（どう見ても人住んで無いよね…）

外見は立派それこそ城と言っても良いくらいなのだがどうやら手入れされた様子は無く外壁には植物のツタが無数に絡み付いている。

（まあ雨風しのげられればいいか）

と考えながらも人がいるかもしれないという一縷の望みをどこかで持っていた。

「……………すいませ〜ん？」

（ああ…なんだか久し振りに声を出した気がする…）

久し振りに出した声が少々情けないような声になった言い訳をする
とこの洋館（もしくは城）の前まで来たのは良いもののやはり人の
気配は無く中へと続く扉はなかったので現在進行形で不法侵入である。

（にしても立派な建物だな）

外壁は植物に浸蝕されているが内側はそうでも無く石造りの床に砂
や埃がコーティングされているが一晩過ごすには問題無いはずだ。

「ハア……………」

知らない場所を半日も歩き続けたのだ肉体的にも精神的にも疲労が
大きい。

（とりあえず使える物を探そう！）

休んでる暇はないが。

何故なら今僕は何も持っていない。できれば火が起こせる道具が欲しいと願いながら屋内を歩く。

（ライター…マッチ…あとナイフも欲しいかな…）

「広いなあ…にしても」

この洋館（もしくは城）はどうやら相当の金や権力を持った人間が住んでいたのだろう。中庭からプールはたまた戦闘訓練？を行うような場所まである。

（荒れ放題だけどね）

草や汚水だらけだが。

カキッ

「少し肌寒いな…」

日が暮れ始めている。

キシッキシッ

「ハア…何故僕がこんなめに…」

とりあえず誰かに当たってみる。

…バキッバキバキッメキッ！

（なんか聞こえるね…）

泣きそうになりながらも足を止める。

そして…

カラカラカラ…

（？）

ズーーン！！

「やっぱりー…！」

悲鳴を上げながら落下し。

僕は気を失った。

「ハア…ハア…ハア…」

逃げる…逃げる…逃げる…

自分に危険が降り懸かる事など無い生活を暮らしていた。

その日僕はほんの少しの好奇心から下層に降りてみたくなり警備員の休憩時間を見てエレベーターに忍び込んだ。

毎日知識を詰め込む事しか娯楽の無い生活にうんざりしてたのかもしれない。

今なら我ながらバカな事をしたと思う。

「イヒヒヒヒ…今日の夕飯は豪華なお食事だ…あ」

そんなバカな僕が下層の犯罪者に目を付けられるのは当たり前なわけ。

「さあさあさあ！ディナーの前にダンスを踊ろうよ！！」

男はゲヒヤゲヒヤ下品そうに笑いながらこつちに近付いて来る。怖くて足が動かない。

知識として知る機会があったはず。

しかしそんな時はどこかで『自分は大丈夫』『自分ならもつと上手くやる』なんて思ってた。

でも実際は腰を抜かして動けなくなっていた。近付いて来る男動かない僕。

張り詰めた状況。（張り詰めていたのは僕だけかもしれないが）

「立て！！走れ！！」

そんな空気を破ったのは単純な動作を表す鋭い声だった。

単純な動作だったからこそ良かったのかもしれない。

僕は声のする方向に走り出した。「ハア…ハア…ハア…」途中からは恐怖も消えていて何も考えずに走った。

頭の中は真っ白。

（ああ…なんか男が喚いてる）

途中からそんな他人事のように思いながら意識が薄れていく。浮遊感。

そして…。

「ハアハアハア…」

（夢…？あれ？…朝？）

朝の清々しい空気が室内に満たされている。

（確か床が崩れて落ちて…）

そこは建物の地下のようだった。

隠されたようなその場所には他人に苦痛を与えるような道具や儀式に使うような道具が平然と並んでいる。

そして部屋の中央には…。

「目覚めたか 少年」

彼がいた。

ブローグ…彼との出会い（後書き）

更新の方は不定期にやっぺていききたいと思ひます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1186g/>

僕的ファンタジー

2011年1月8日23時16分発行